

カルシユの足跡を追つて

◇14◇

若松 秀俊

天から優しくほほえむ
 カルシユ博士の見えない
 縁(えにし)の糸で導かれ
 れるように、筆者は彼の
 足跡をたどりながら、つ
 いに狂騒で美しいマール
 ブルクの地に降り立つ
 た。

縁の糸 (上)

この町のシンボルのエ
 リザベート教会を左に見
 て、木組みの古風な家々
 が並ぶ石畳の通りに入っ
 た。そこを軽い靴音を立
 てながらゆっくり歩を進
 めると、緩やかな登り坂
 の小径(みち)に出た。

霞と光の陰影の織りな
 す情景の中に、カルシユ
 夫妻の在りし日の姿を見
 式が遠くライン河

みを背に感じつつゆっく
 りと歩を進めていくと、
 これまでずっと心に抱い
 ていたカルシユへの熱い
 思いがあふれてきた。
 「石畳 胸もと熱く
 登りゆく つたの絡まる
 古城の街の」
 れを左手に見ながらさら
 に下ると、街の広場が眼
 に入る。

そこにはたまたま古びた
 の七百年前の祖先が宗教
 家であったことを伝える
 かどに、眠る偉業を「
 そんな感慨が胸にこみ
 上げてきた。
 そこからさほど遠くな
 る。この地は、河を挟
 んで広がる美しい城下町
 「見ぬ人の 跡を尋ね
 し はるばると この街
 眠る偉業を」
 フリーデルンが、そう語
 ってくれた。おそろしく
 テン語か何かの講義のと
 きであったろう。
 学生時代には、二人と
 も経済的に恵まれなかつ
 たので、学生食堂のメン
 ン



マールブルク城から広場に通じる小径

い通りの小さなアパート
 に、二女のフリーデルン
 が、現在住んでいる。
 広場に面した場所に、
 フリッツがよく立ち読み
 した本屋がある。ここで
 フリッツはドレスデンの
 博覧会以来、再びラファ
 ディオ・ハーンの書を目
 にすることになった。そ
 して、これを機に自分の
 運命が急速に日本へと天
 きく傾いていくことにな
 った。
 フリッツはマールブル
 ク大学文学部の建物の二
 階の教室で、後に妻とな
 るエンメラと出会った。
 拙著『湖畔の夕映え』
 (小説)では、留学生の
 長屋らとともによく利用
 したように描いたが、事
 実は少し異なるようであ
 る。長屋に対するドイツ
 語のレッスンも研究室で
 行っていた、とのことだ
 ある。
 (東京医科大学歯科大学大
 学院教授)
 文中敬称略

大学でエンメラと出会う